

# 戦前における日本金融史の一断面

## ——「両大戦間における北海道内地方銀行」補遺——

吉 田 賢 一

### One Phase of the Japanese Financial History in Prewar Age

#### —— A Supplement to ‘Regional Banks in Hokkaido between the Two World Wars’ ——

YOSHIDA Ken-ichi

#### 目次

- I 序 —— 昭和金融恐慌と『銀行法』
- II 渡辺治右衛門家について
- III 渡辺治右衛門と串田萬蔵
- IV 串田萬蔵と高橋是清
- V 東京第百十九国立銀行について
- VI 結びに代えて

#### I 序 —— 昭和金融恐慌と『銀行法』

わたくしは以下に掲げた一連の論稿において、大正・昭和前期における北海道金融界の動向を分析した。

1. 「金融危機下の北海道金融界と銀行合同 —— 百十三銀行・(旧)北海道銀行・北海道拓殖銀行を中心として ——」地方金融史研究会編『地方金融史研究』第31号(社団法人全国地方銀行協会, 2000年3月)所収。
2. 「両大戦間における北海道内地方銀行 —— 函館銀行・百十三銀行・(旧)北海道銀行を中心として ——」(上, 中, 下1, 下2・完)同上誌第32～35号(2001～04年各3月)所収。
3. 「北海道における銀行合同 —— 函館銀行・百十三銀行・(旧)北海道銀行の合同関係を中

心として——」石井寛治・杉山和雄編『金融危機と地方銀行——戦間期の分析』（東京大学出版会，2001年12月）所収（第6章）。

4. 地方金融史研究会『日本地方金融史』（日経金融新聞編，日本経済新聞社，2003年6月），47道府県および3旧植民地のうち「北海道」を担当。

昭和金融恐慌<sup>(1)</sup>は昭和恐慌（1929年10月勃発の世界経済恐慌の日本的発現形態，30～31年）と並んで，歴史にその名を残す象徴的な経済事件であった。というのもそれは，明治維新以降およそ60年にわたって形成されてきた日本の金融界を激甚なる再編の坩堝へと投げ込み，中小・零細銀行を大量淘汰するとともに，少数大銀行による金融寡頭体制の基礎を築いたからである。実際，26（昭和元）年末に1,577行（特殊銀行6行，農工銀行27行，普通銀行1,420行，貯蓄銀行124行）を数えた銀行数は，6年後の32（同7）年末には650行（特殊6，農工19，普通538，貯蓄87）にまで減少する。残存率41.2%，まさに激減である。

これにはさらに，『銀行法』という法政的な要因もおおきく影響していた。同法は『銀行条例』（1890〈明治23〉年8月25日公布，93年7月1日施行，全11条，21〈大正10〉年4月の改正後は17条）の後身で全47条からなり，金融恐慌勃発直後の3月30日に公布され，発効は翌28年の1月1日（『銀行法施行細則』は27年11月17日公布，28年1月1日施行）であった。主眼は銀行の資力充実におかれ，

「銀行業ハ資本金百万円以上ノ株式会社ニ非ザレバ之ヲ営ムコトヲ得ズ」(第1条第1項)

とし，さらに，

東京・大阪の2大都市については200万円以上（同上）

人口1万人未満の町村に本店をもつ銀行は50万円以上（41条2項）

とすることを規定，この条件を満たさない銀行（無資格銀行または非適格銀行という）には，『銀行法』施行後5年の猶予期間が与えられた（41条1項）<sup>(2)</sup>。最終期限は1932（昭和7）年12月末ということになる。27年3月当時の無資格銀行は809行とされたが，同法施行日には617行を数えた<sup>(3)</sup>。27年12月末の普通銀行数は1,283行であるから，ほぼ半数（48.1%）が無資格銀行だったことになる<sup>(4)</sup>。金融恐慌による銀行倒産のトップを切ったのが，東京渡辺銀行とあかち貯蓄銀行であった。

先代（九代目渡辺治右衛門・新太郎，1847-1909）の生前には，「其営業振り堅実地味ニシテ一般ノ信用厚ク，市中二流銀行トシテハ預金額比較的多ク順調ナル経路ヲ辿」（日銀調査局）った東京渡辺銀行であったが，1920（大正9）年の戦後恐慌（反動恐慌）以後は同じ調査局によって，「其営業振り無謀放漫ヲ極メ殆ンド銀行常識ノ想像シ得ザルモノアリ」<sup>(5)</sup>と酷

評されるまでになる。

本稿は、先代長男の渡辺治右衛門（十代目・源治郎，1871-1930）と、のちに三菱銀行会長となる串田萬蔵（1867-1939）の2人を中心に、大正から昭和前期における日本金融史の一齣を描写するものである。

## Ⅱ 渡辺治右衛門家について

九代目治右衛門は艶福家で、実に子沢山であった。長男は夭逝したが、源次郎（明治4年生まれ）、美尾（同5年）、勝三郎（6年）、四郎（13年）、花（18年）、六郎（20年）、園（23年）と、ここまででも5男3女の8人、さらに八郎と九郎（42年）もいた<sup>(6)</sup>。もちろん全員、妻の婦人（1852-1927・9・6）との間に生まれた子女たちである。

東京渡辺銀行倒産時の当主は十代目の渡辺治右衛門で、九代目の次男・源次郎が襲名した。九代目（新太郎，1847-1909）は八代目・信明の長男であるが、信明（1816-82）は上野国碓氷郡松井田の出身で旧姓を大河原といい、七代目・福秀（1862年没）の養嗣子となった人である。福秀に実子がなかったため、彼は六代目の遺子・吟に信明を迎え、1868（明治元）年に八代目治右衛門を襲名させている（墓は浅草の清光寺）。以下に、7代目から13代目までの7名を列举しておこう。

7代目治右衛門・福 秀（ ? -1862）

8代目治右衛門・信 明（1816-1882，享年67才）聴泉院，妻は吟

9代目治右衛門・新太郎（1847-1909，享年63才）宏徳院，妻はふみ

10代目治右衛門・源次郎（1871-1930，享年60才）寛弘院，妻は節子

11代目：源一氏（正金行員，妻は輝子，1900-85）

12代目：邦夫氏（1936-）

13代目：武史氏（銀行員）

渡辺家のルーツについては播州（播磨国，現兵庫県南部）明石（アカシ）説が正しいが、尾州（尾張，愛知県西部）明治（アカヂ）とする謬説も多々ある。先ず，以下の2著<sup>(7)</sup>の説明に誤りはない。

「渡辺氏ハ累世江戸ノ豪家ナリ。曩祖治右衛門元禄五年江戸本材木町一丁目ニ於テ塩干魚及肥料商ヲ開業シ，享保十年七月没ス爾来相継承シテ七世治右衛門ニ至ル」(『國乃礎』後編下編，1895年，110-4頁。元禄五年は1692年，享保十年は1725年，七世治右衛門は福秀をさす——吉田)。

「十代前の祖先は播州明石から江戸に出て……明石屋治右衛門を称したところから，夫の

『あかぢ』の称号が起って……」（『財界双六』中外商業新報社，1919年，272頁）。

しかし時事新報社編『財づる物語』（東洋経済新報社，1926年，265頁）は「祖先墳墓の地，尾張あかぢの名に因んだもの」とし，また，『財界物故傑物伝』下巻（実業之世界社，1936年，654頁）は渡辺家の出身地を愛知県の明治（あかぢ）と解し，屋号「あかぢ（明治）屋」という海産物商を営んだ，としている<sup>(8)</sup>。

さらに，大毎編集主幹だった下田将美は，「わたしは勝三郎という人をよく知っている」としつつも，時事新報説に依拠してなのか以下のように述べる。渡辺勝三郎（1873-1940）とは九代目治右衛門の第4子3男で，十代目・源次郎の長弟である。

勝三郎は「どんな事業にでも手を出してむやみに財界に名前を出して活動するのが大好きだった。遊ぶことも大好きで派手なまねをした。」「元来，渡辺の家は『あかぢ』を称した。これは先祖が尾張の『あかぢ』という所の出身だったので，その地名をとったのだということ，あかぢ銀行という名の由来もそこにある。」<sup>(9)</sup>

しかし博物学者の荒俣宏氏となると，上記三者の比ではない。氏のいう「渡辺治右衛門」とは十代目・源次郎のことなのであるが，源治郎は先代の養嗣子ということにされ，八代目・信明と完全に取り違えられているからである。長文ではあるが，重要なので主要箇所を全文を敢えて引用しておきたい（アンダーラインは吉田のもの，【 】内は吉田による訂正または注記）。

「渡辺治右衛門（一八七一～一九三〇）……は明治四年十二月，美濃の海津郡高須町に吉田秀太郎として生まれた。幼い日に日本橋の橋詰で大きな乾物問屋をいとなんでいた豪商，先代の七代目渡辺治右衛門に引き取られ養子となった。そもそも渡辺家は屋号を明治屋【明石屋】といい，先代治右衛門は多額納税者であった。明治とは愛知県にある地名で，渡辺家の出所である。市民の義務“納税”をキッチリ果たしたので，名誉なことに貴族院議員にも列せられた。先代治右衛門はその莫大な資産を活用するため，第二十七銀行【正確には東京第二十七国立銀行】を明治十年に設立した。さすがに屋号の“あかぢ”は赤字につながるので『あかぢ銀行』とは名付けなかった。このへんのセンスも先代の慎重さの表われだろう。

ちなみに書くが，初代治右衛門は享保年間【元禄年間】に愛知の明治【播州の明石】から江戸に出て，日本橋四日市町に『明治屋』と称する海産物商を開業した【明治屋ではなく明治商店，後者への改称は維新以後】。これが『あかぢ』のルーツである。

以後，六代目まではごくあたりまえの商人だったが，七代目に出た治右衛門【九代目治右衛門・新太郎】が小金を貯えて土地の買い占めをやったところ，大当たりして一躍

大地主になった。七代目は首に弁当箱を下げ、毎日市中をうろついて、値上がりしそうな土地を物色したというのだから、ものすごい。これを値切り倒して買い占めるので、世間では『変人』の風評がもっぱらだった。ところが明治の世の東京集中が始まって、あれよあれよというまに土地が値上がりし出したのである。

こうして、雨宮敬次郎【1846-1911】や若尾逸平【初代甲府市長、貴議、1820-1913】などが東京市中に鉄道を敷設しようと動きだした頃には、治右衛門の土地がいたるところで路線とぶつかるようになっていた。甲州財閥は仕方なく治右衛門も鉄道の仲間に加え、またまた彼をもうけさせてしまった。

この勢いにかけて、明治十年に作ったのが、前述した第二十七銀行である。明治四十五年には資本金を百万円とし【100万円としたのは二十七銀行改称時の明治30年7月】、株式会社に改組、さらに大正九年には資本金を三百万円【500万円、東京渡辺銀行改称時】に増やした。しかし七代目は勲四等に叙せられたのち、明治四十二年十一月に病没している。

八代目治右衛門となった秀太郎【十代目治右衛門・源治郎】は、突然、莫大な遺産を相続したわけだが、しかしこの八代目も、先代の言いなりになっていたわけではない。おそらく故郷に錦を飾る気持ちで、明治三十年【大正2年】、高須町【日本橋区通】に貯蓄銀行【あかち貯蓄銀行をさす】を創立しているのだ。もともと治右衛門は先代に見込まれたほどだから、一応の商才を備えていたのだろう。」<sup>(10)</sup>

荒俣氏は出典を記していないが、森まゆみ氏は、「当時のジャーナリズムでは渡辺家が愛知出身で、土地買い占めが七代目であるという情報が多く流布していたようである」と誤伝の多い理由を指摘しつつも、荒俣氏は「温厚で人の好い十代目治右衛門をことさらに『奇っ怪な紳士』に描き出している」が「実像からはほど遠いように思われる」と考証・記述の杜撰さを批判している<sup>(11)</sup>。両行の沿革を記しておこう<sup>(12)</sup>。

東京渡辺銀行の淵源は東京第二十七国立銀行である。同行は、1877（明治10）年10月、資本金30万円をもって東京の日本橋区本材木河岸6号地（のち本材木町一丁目）に設立されたが（12月7日開業免状下付、12月28日開業）、20年の営業満期をもって97（明治30）年12月に株式会社へと改組、二十七銀行と改称した。資本金は100万円（うち払込21万円）、預金97.5万円、貸付金123.0万円とそこそこのクラスではあったが、支店はもたず、役員7名、使用人は副支配人以下12名で、株主31名のうち上位6株主で総株2万株中18,647株・93.2%（頭取は6,244株・31.2%）を占めていた。株式会社とはいっても、個人銀行とほとんど変わらない多分に縁故的性格の濃い銀行であった。

1920（大正9）年4月5日、この二十七銀行を再び改称したものが東京渡辺銀行である。資本金500万円（払込200万円）、日本橋、根津、須田町、大塚、早稲田、巢鴨、池袋、千住、浅草、芳町、吉原などに8支店4出張所を置いて業容を拡大したが、前述したように、恐慌

下の取付によって27（昭和2）年3月15日から休業状態となり、翌28年の6月29日に破産宣告となった。

一方、あかち貯蓄銀行は、1913（大正2）年11月28日に福岡から東京に移転した豊岡貯蓄銀行（1901〈明治34〉年5月31日、八女郡豊岡村に設立、資本金3万円）を渡辺一族が買収・改称したものである（本店は日本橋区通1の2）。18年時点で10万円であった資本金を翌19年には100万円（うち払込37.5万円）とし、14年3月根津支店、9月須田町支店、12月大塚支店、16年？芳町支店と勢力範囲を拡張したが、恐慌が勃発した27（昭和2）年の12月15日に任意解散を決議した。

ちなみに横浜にも渡辺銀行があったが、東京渡辺とは独立に、1912（明治45）年6月に創立したものである。頭取の渡辺福三郎（1855-1934）は九代目治右衛門・新太郎の次弟で、十代目・源次郎の叔父である。渡辺銀行は資本金300万円（うち払込み200万円）の中堅銀行となったが、福三郎頭取が没して4年目の38（昭和13）年、第一銀行（明石照男頭取）によって買収され消滅している。

### Ⅲ 渡辺治右衛門と串田萬蔵

大正末から昭和初頭にかけて、小林幸太郎（1876-1938）なる人物が糸屋銀行（本店旭川）の救済にあたり東奔西走の尽力をなしたことについては前掲「両大戦間における北海道内地方銀行（下2・完）」（『地方金融史研究』第35号所収）において述べたが、糸銀の山本菊蔵頭取が1926（大正15）年6月に訪問した小林幸太郎邸は、東京府北豊島郡の「日暮里渡辺町」に所在した。「渡辺」とは東京渡辺銀行の頭取家、渡辺治右衛門家の「渡辺」である。姉妹行である「あかち貯蓄銀行」の頭取は十代目治右衛門・源次郎の三弟・渡辺六郎（1887-1962）で、東京渡辺銀行の専務取締役でもあった。

渡辺町は「昭和九年に町名変更されて、現在は……東京都荒川区西日暮里四丁目、開成学園付近一帯がそれに当たる」が、「大正の中頃以降、画家の石井柏亭（洋画家、石井鼎湖長男、本名満吉、1882-1958——吉田、以下同じ）をはじめ、建畠大夢（彫刻家、本名弥一郎、1880-1942）、藤井浩祐（コウユウ、彫刻家、1882-1958）、久保田万太郎（小説家・劇作家・俳人、俳号は傘雨、1889-1963）、野上豊一郎（能楽研究者、英文学者、号は臼川、1883-1950）、吉江喬松（タカマツ、詩人、号は孤雁、1880-1940）といった彫刻家や作家が多く住んでい」た<sup>(13)</sup>。

ところで、九代目治右衛門（新太郎、八代目・信明の長男）は東京第二十七国立銀行の頭取就任とは別に、1877（明治10）年結成の「日本橋四日市組魚市場組合」<sup>(14)</sup>の初代「頭取」でもあったが、時の「副頭取」は群馬県前橋出身の串田孫三郎、すなわち、のちに三菱銀行第二代会長（岩崎小彌太の後任、1921〈大正10〉年9月24日～35〈昭和10〉年3月5日在任）となる串田萬蔵（日本橋材木町に出生、1867-1939）の父親であった。哲学者・詩人・随筆家でパスカル（Blaise Pascal, 1623-62）を研究し東京外大教授をつとめた串田孫一氏（1915-

2005)は萬藏の長男、演出家・俳優・芸術監督の串田和美氏(カズヨシ、孫一氏長男、1942-)は萬藏の孫にあたる。萬藏は十代目・治右衛門より4つ年長であるが、如何なる経歴と人格を有する人物だったのだろうか。東京日々新聞と大阪毎日新聞のエコノミストだった岩井良太郎によれば、「翁といふ尊称」は「長老で、而も徳望家でないと……受けることが出来ない」という。岩井は「翁」と「老」の違いについて、当時「三菱合資総理事」として財閥の中核部にいた串田萬藏を引いてこんなことを書いている。

「世間では彼のことを串田翁と呼ぶ。……、既に七十に近い老人だから、年齢の上からいつて、勿論、翁と称して差支はない。／だが、……、年寄の資本家なら、誰でも翁の尊称をもつて呼ばれるものとはきまらない。早い話が、三井の池田成彬だつて、やはり七十に近い爺さんなのだが、世間、誰も池田翁と呼ぶ者は無い。強ひて敬称(?)を付ければ、池田老といふくらゐのものだ。／……高橋是清や故渋沢栄一などは、世間承知のやうに、翁の敬称で呼ばれたが、これらの実例から帰納的に判断すると、どうも翁と老との相違は、……内容の差異から来るもののやうに考へられる。長老で、而も徳望家でないと、翁といふ尊称を受けることが出来ない、といふのが、語釈上の定説のやうである」<sup>(15)</sup>。

串田翁は、同一著者の別著では「福德圓滿の好々爺」<sup>(16)</sup>とも評されている。

萬藏の父・串田「孫三郎は年少十一、二歳の頃発奮して江戸にやってきて、さる商家に丁稚奉公をし、のち独立開店した。その店は魚やその他水産物をとりあつかつていたようであり、北海道との商取引が多く、その関係で函館に本店をもつ国立第百十三銀行の取締役をもかねていた」<sup>(17)</sup>。

引用にある「さる商家」とは「明治屋」(アカヂヤ)であり、当時の当主は八代目治右衛門・信明である。佐高信氏は、「縁とは不思議なもので、その息子の代に、昇る銀行と消える銀行の明暗を分けた三菱銀行と東京渡辺銀行の頭取(串田萬藏と十代渡辺治右衛門)の親同士(串田孫三郎と九代治右衛門)は、ここに至るまでに深いつながりがあった」<sup>(18)</sup>とし、以下のような興味ぶかい事実を紹介している。渡辺家は代々、江戸橋近くの四日市で鮭・鰹節などをあつかう屋号を「明治屋」という塩物問屋を営んできており、孫三郎は「少年時代、渡辺家の経営する明治屋商店(屋は不要——吉田)に店員として住み込み、『後独立して明孫商店を興し、明治商店の支店格として業界に活躍』した」<sup>(19)</sup>。

「孫三郎は、無趣味な頭取の治右衛門と違って、『性格、明朗にして淡泊、世情に通じた洒脱な人』で、当時流行った一中節などを歌う粋人だった」<sup>(20)</sup>。孫三郎の生年は明らかではないが、九代目・新太郎と萬藏の生年(1847<弘化4>年、67<慶応3>年)から推定して、函館第百十三国立銀行(後掲)の創立メンバー、杉浦嘉七(初代頭取、1843-1923)、田中正右衛門(第二代頭取、1838-1920)、初代相馬哲平(第三代頭取、1833-1921)、初代渡辺熊四郎

(1840-1907) らより若干年少、天保末から弘化にかけて(1840年代)の生まれと思われる<sup>(21)</sup>。

「孫三郎は洒脱な苦労人ではあったが、その家庭教育はかなり厳格」で、近所の佐々木小から新設の城東小へと転校した長男の萬蔵が「十一、二歳のころになると、第四国立銀行の東京支店に勤務していた辻という人物に簿記法を学」ばせるべく「辻の家に通って勉強」させたという<sup>(22)</sup>。さらに孫三郎は萬蔵が小学校を終わると、自分が「関係していた第百十三国立銀行の東京支店の小僧」にした<sup>(23)</sup>。

萬蔵は登校前と下校後の勤務を励行しつつ神田の共立学校(開成中学校の前身、萬蔵は当初の夜学・昼勤から転部)を卒業、「共立学校では高橋是清にしたしく教えをうけた」。1885(明治18)年に大学予備門へと進学したが、「ちょうどその頃、孫三郎とも親交があり、さらに萬蔵自身親しく教えをうけた高橋是清が農商務省にはいり特許局事務取調のため、渡米することとなった。これを知った串田孫三郎は愛児を高橋に託し、アメリカに留学せしめようとした」<sup>(24)</sup>という。

「串田は十九歳の若さで高橋是清にしたがって渡米」、ペンシルバニア大学卒業後は“Browns Brothers Company”という個人銀行に入行し4年の勤務をへて帰国、『三菱銀行の前身たる百十九銀行に著目し、知人の紹介にて時の頭取豊川良平氏(前名小野春彌、岩崎彌太郎の母美和〈小野慶蔵の娘〉の甥、慶応義塾卒、貴議、1852-1920——吉田)に面会し……直に同銀行の中等の事務員に採用された。夫れは明治二十七年、二十八歳の時であった』<sup>(25)</sup>。

銀行頭取家の長男か否かの違いはあるものの、十代目渡辺治右衛門が九代目の膝元において国内事業に専念したのに対し、串田萬蔵は長期の外遊によって広く世界を見聞し西洋の諸事情を体得した、ということになる。

#### Ⅳ 串田萬蔵と高橋是清

加藤俊彦氏は、「以上は『財界巨頭伝』によったが別の説もある」として次のような疑問を提起している。

「最近公刊された野田一夫氏の『財閥』によれば、串田は『(岩崎)小弥太(四代目の三菱合資社長。岩崎弥之助の長男——引用者)の個人的親友でもあり、小弥太とともに渡米しペンシルバニア大学を卒業した後、暫くアメリカの銀行で働いた経験があったため、帰国すると小弥太の縁で三菱合資銀行部へ入社した』(一七四ページ、加藤武男の項)とある……が、ちょっと高橋是清と岩崎小弥太といれかわった感じもある。筆者としてはいづれがまことであるか、判断がつかかねる」<sup>(26)</sup>。

この問題は先学の業績で解決済みなのかも知れないが、わたくしの狹隘な文献渉獵のかぎり以下に記しておきたい。両著の相異点は3つ、串田萬蔵の渡米同行者と帰国後の就職紹



介者（野田氏のいう「縁」者）は高橋是清（本姓川村，幼名和喜次，1854-1936）か，それとも岩崎小彌太（1879-1945）か，そして，串田の最初の就職先は百十九銀行か三菱合資銀行部か，である。

先に第3点を吟味しよう。串田の入社は「明治二十七年，二十八歳の時」，一方，三菱合資会社（三菱社が1893年12月改組・改称，社長久彌，監務彌之助）が資本金500万円（出資額は久彌・彌之助各250万円，日露戦争後の1907年2月久彌1千万円を追加，同時入社の小彌太に彌之助が持分100万円譲渡，結果，出資額は久彌1,250万円・彌之助150万円・小彌太100万円の計1,500万円）のうち100万円をわけて「銀行部」を創設し百十九銀行の業務をひきついだのは1895（明治28）年10月（16日開業，9月7日設立認可）で，串田入社時の1895（明治27）年に三菱合資の「銀行部」はまだ存在しない。加藤氏の言うように，串田は「三菱合資銀行部の業務開始の直前である二十七年に百十九国立銀行に入社したのであるが，銀行部にうつって，最初は預金係を拝命し」た<sup>(27)</sup>というのが真相のようである。

つぎに第1の点について，野田氏は重刷の同書（『財閥——経営者にみる生態』新書129，中央公論社，第1刷は1967年）で「小弥太」（引用文中の2箇所）を「久弥」（彌太郎長男，三菱第三代総帥，1865-1955）に訂正している。1879（明治12）年生まれの小彌太は串田より12才も若く，しかも留学先はイギリスで，1900（明治33）年に渡英し，ケンブリッジ大学を卒業している。「個人的親友」たるには年齢差がありすぎ，その点慶応元年生まれの久彌であれば2才年長，同じペンシルバニア大学の卒業でもあり，同行者の可能性は高くなる。

しかし『岩崎久彌傳』には，久彌は留学のため1886（明治19）年「五月十三日……袂別の宴を催し，その月東京を出発し」，「同行者は三菱の鉱山専門家長谷川芳之助と東京大学出身の莊清次郎であつた」<sup>(28)</sup>とあり，串田の同行者が岩崎久彌であった事実はない。長谷川（1855-1912）は肥前唐津（佐賀県）出身，莊（1862-1926）は肥前大村藩（長崎県）の出身である。では，串田を引率したのは高橋是清なのか。この問題は『高橋是清自伝』における以下の記述によって解決をみる。加藤氏は「判断がつきかねる」としつつも，「高橋是清と岩崎小弥太といれかわった感じ」と感想を述べていた。引用はされていないが，加藤氏はこの高橋の『自伝』を想起していたのかも知れない。

「明治十八年（三十二歳）一月（十一月の誤り——吉田）十六日付をもって欧米出張の辞令を受け，……二十一日付をもって農商務省書記官に任ぜられ，同二十四日横浜出帆の船で米国へ出発することとなった。／その時同行して行ったのが，前の三菱銀行頭取の串田万蔵君と吉田鉄太郎という人であった。／どうしてこの兩人を連れて行くことになったかというに，串田の方は当時その親父さんが，第百十三銀行の江戸橋支店長を勤めておった。ところが，鈴木知雄君（トモオ，陸奥仙台藩士，高橋の同僚で一緒に共立学校創設に参加，一高教授，のち日銀出納局長，本姓古山，1854-1913——吉田）の兄古山数高君も同じく同銀行に勤めておって両者昵懇の間であった」。串田は「明治十八年の七月には，はや

大学予備門の入学試験に及第して、その初年生となっていた。／ちょうどそのころ、私の海外出張が決定したので、私は十一月の十三日に、鈴木知雄、古山数高、横田広太郎の三人を自宅に招んで、いろいろと留守中のことを頼んだ。その席上たまたま串田少年の話が出てあれも一緒に洋行さしてはどうだろう、ということになり、……」<sup>(29)</sup>。

しかしそれでも相異の第2点、串田を第百十九国立銀行に紹介した「知人」または「縁」者は高橋か久彌かという問題が依然として残る。この知人は野田氏では同行者と同一の人物(久彌)とされているが、加藤氏の依拠する『財界巨頭伝』では判然としない。まったく別の第三者の可能性もあるが、当時の高橋は日銀馬関支店長(1893年10月1日の開業とともに西部支店長から転任、95年8月26日から横浜正金銀行本店支配人)であった。高橋は1854(嘉永7)年閏7月の生まれで、52(嘉永5)年1月生まれの豊川(串田入行時の第百十九銀行頭取)とは2才しか違わない。懇請を受けた高橋が、串田を豊川に直接紹介したとしても何ら不思議はない。いずれにしてもこの点に関しては、今後の検討課題としたい。

## V 東京第百十九国立銀行について

串田萬蔵が入行した東京第百十九国立銀行について概説しよう。同行は北海道にも密接な関係をもつ銀行であった。概要は加藤俊彦氏の叙述<sup>(30)</sup>によるが、経歴・生没年等の詳細は吉田の補筆である。

同行は1878(明治11)年12月、旧臼杵藩士等により資本金30万円で設立された銀行であるが、創立直後から北海道物産の内地販売をになう小美田利義<sup>(31)</sup>経営の「楽産商会」に1万5千円の出資をおこない、同商会に対しては、函館第百四十九国立銀行も同額の融資をなしていた。後者は79年8月、島原藩士の渡辺亨が旧臼杵藩主の稲葉家<sup>(32)</sup>、および旧島原藩主の松平家<sup>(33)</sup>の援助によって、資本金13万円をもって設立された道内2番目の国立銀行である。

楽産商会は、事業拡大のため三菱<sup>(34)</sup>からも増資資金15万円を借り入れたが、松方デフレの過程で「破産状況におちいり、関係両国立銀行もまた破産にひんした」ため、第百十九銀行は結局、第百四十九銀行を合併した上、行名のみを残して三菱へと業務を継承した。いずれも彌太郎病没(1885〈明治18〉年2月)直後の5月であるが、その郵便汽船三菱会社も10月、政府の仲裁により共同運輸会社<sup>(35)</sup>と合併、日本郵船株式会社へと解消してしまう<sup>(36)</sup>。

第百十九銀行の新頭取に就任したのは東京英語学校<sup>(37)</sup>の元校長で三菱為換店(1880・4・1～84・11操業)元締の肥田昭作であったが、1889(明治22)年に豊川良平へと代わる。豊川は95年9月の三菱合資銀行部創設から銀行部長、副長2名は三村君平(第百十九創立メンバー、本店支配人から新任、1910年部長)と桐島像一(1890年三菱社入社、1919年三菱銀行監査役)がつとめた。串田は1901(明治34)年に神戸支店から本社勤務となり、12月に3人目の副長に就任、14(大正3)年に銀行部長、16年には職制改革により銀行部専務理事となった。

串田は初代の岩崎小彌太にかわり、1921（大正10）年から35（昭和10）年まで都合15年間にわたり会長<sup>(38)</sup>をつとめたあと、三菱合資会社総理事（三菱銀行取締役留任）となり財閥本体の中枢部へとすすむのであるが、37年9月6日にはその職を辞し、2年後の39年9月5日、胆嚢炎のため72年7ヶ月の生涯を閉じる。

串田が会長を勇退した翌1936（昭和11）年の9月14日、川崎第百銀行が川崎貯蓄銀行と東京貯蔵銀行の2行を同時合併し、11月11日、行名を「第百銀行」としている。第百銀行は7年後の43年4月三菱銀行への合併によって消滅するが、前身の川崎第百銀行は井上準之助日銀総裁の斡旋により、老舗の川崎銀行と第百銀行が1927（昭和2）年9月15日に合同・改称したものであって（形式的には川崎が第百を株式比5：9の割合で吸収合併）、金融恐慌により4月下旬に休業した十五銀行（資本金1億円）にかわり、東京所在の五大銀行に名を連ねる有力銀行であった。

十五銀行の当時の頭取は松方正義長男の松方巖（1915年就任、幸次郎は長弟、薩摩出身、1862-1942）で、責任を一身に負って全公職を辞し公爵位（24年取得）も返上した。十五銀行は翌28年の4月、新頭取に大蔵次官の西野元（ゲン、24年貴議、41年勸銀総裁、茨城県出身、1875-1950）、常務取締役に森俊六郎（もと大蔵省銀行局・理財局長）および横山昌次郎の2名を迎え、資本金2,000万円をもって再開業したが、その後44年8月1日に帝国銀行<sup>(39)</sup>に合併されるまで都合17年にわたって存続した。

十五銀行の森常務は「大正9年台湾銀行副頭取、満鉄理事等に挙げられた手腕家」<sup>(40)</sup>で、また横山常務は、大正はじめに北海道銀行が経営危機におちいった際、日銀から同行の専務取締役（1915年10月3日～20年3月3日在任）となって再建に尽力した人物である。道銀は二代頭取の添田弼が1916（大正5）年1月末をもって引責辞任して以来頭取制を停止し、横山専務が代表責任者をつとめた。『銀行大鑑』は横山のことを、「京都同志社を経て米国エール大学を卒業し帰朝後日銀に入り後ち北海道銀行専務として腕の冴えを見せた泰西通」<sup>(41)</sup>と紹介・高評している。

## Ⅵ 結びに代えて

以下『銀行大鑑』の記述にしたがい、東京第百十九国立銀行にかかわりの深い川崎・第百・川崎第百・東京貯蔵・川崎貯蓄5行の沿革を紹介して本稿を閉じたい。【 】内は『三菱銀行史』<sup>(42)</sup>の記述による訂正、出身地・生没年等の詳細は吉田の補筆によるものである。

川崎銀行は1880（明治13）年3月、川崎八右衛門（常陸出身、1834-1907）を盟主に資本金50万円で創立した（合併時1,000万円、393頁上段【1874＝明治7・12東京に創立した「川崎組」が80・3・25改組・改称、資本金30万円、日本橋区檜物町14番地、92・8川崎金三郎頭取〈のち八右衛門襲名〉、1919＝大正8・12株式会社化し資本金を1900・6以来の100万円

から一挙10倍の1,000万円とする、26・3伏見銀行〈資本金50万円，1888・2創立〉買収，1927・6東京市日本橋区通3丁目に本店を移転，合併時は星埜頭取，関根・河合2常務〈以上の3名については川崎第百銀行の箇所を参照〉，高梨博司常任監査役】。

第百銀行は，旧因幡鳥取藩主で侯爵の池田輝知を中心に【「池田侯の尽力により原六郎（本名進藤長政，1883横浜正金頭取，但馬出身，1842-1933），川崎金三郎，安田善次郎，宮部久「等相謀り」】1878（明治11）年6月資本金20万円をもって創立した「東京第百国立銀行」【8・15認可，9・4開業，原六郎頭取，日本橋区萬町1番地】が98年4月，資本金100万円の私立銀行へと改組したものである【8・15，資本金40万円，新頭取に高田小次郎（因幡鳥取藩士，東京貯蔵取締役兼任，1847-1912）】。

1903（明治36）年に京都の中京銀行（ナカギョウ，1895・9創立）を合併【5月，資本金10万円の同行を合併し資本金50万円に】，42年に資本金を200万円【1903・7に60万円，07・2に200万円】，1912（大正元）年【8月】には1,000万円とし，合併時の資本金2,500万円は20（大正9）年【6月】以来のものであった（393頁上段－下段【1912＝明治45池田謙三頭取（後述），23＝大正12原邦造頭取，23・11牛込中央〈資本金20万円，1898・6創立〉，25・11高砂商工〈資本金200万円，1919・8創立〉，26・3日進〈資本金100万円，1907・2創立〉を買収，合併時は原頭取，本庄重俊・小倉清男・林茂久3常務，小谷久男常任監査役】）。

川崎第百銀行は初代頭取と副頭取【筆頭常務】に星埜章（1921・7まで就任，前川崎頭取，元日銀大阪支店長）と関根善作（21・7頭取，前川崎常務，元日銀京都支店長），常務取締役2名に河合鉄二（前川崎常務）と吉田良三（42・7まで就任，前第百営業部長）が就任して発足した【新本店は日本橋区萬町1番地の旧第百銀行本店】。

同行の合併資本金は2,500万円であったが，1927（昭和2）年11月「麹町銀行」【12月，資本金1,010万円，1889・10創立，1922以来川崎系】を合併，【28年4月「加島銀行」支店】4年1月「所沢銀行」【2月，資本金300万円，1893・4創立】を買収し，資本金3,398万8,500円の大手行となった（本店は東京市日本橋区通1丁目，392-396頁【資本金3,398万円は麹町合併時，川崎貯蓄・東京貯蔵合併時3,898万8,500円，39・2羽田銀行〈資本金100万円，1900・9創立〉買収，三菱銀行と合併時は関根頭取，河合・渡邊眞平〈38・7就任〉・八杉直〈42・7就任〉3常務】）。

東京貯蔵銀行は「専業貯蓄銀行」の嚆矢で，池田謙三（1912第百頭取，但馬出身，1854-1923），原六郎等の斡旋により1880（明治13）年6月資本金2万円をもって創立した（【3月発起・出願，4月認可，6月開業】6・12開業，矢嶋作郎頭取——吉田）。

1886（明治19）年5万円，99（同32）年10万円，1901（同34）年20万円，17（大正6）年50万円，19（同8）年100万円と相次いで増資し大型化したが，23年池田謙三頭取にかわ

り原邦造一派が第百銀行の経営を掌握して以来、同行の「別働隊として貯蓄業務を営」み、1927 = 昭和2年【7年】には資本金200万円の有力銀行となった。川崎第百と合併時の資本金は200万円、頭取は原邦造（原六郎養子、旧姓田中、大阪出身、1883-1958）、常務取締役は本城郡次郎（もと十五銀行調査課長・検査部副長、大正13東京貯蔵常務）がつとめていた（東京市日本橋区通1丁目5番地、422頁-423頁）。

川崎貯蓄銀行は川崎八右衛門により1890（明治23）年に開業した「東海貯蓄（貯金の誤り——吉田）銀行」（資本金〈当時は「予納金」と称し府庁に預入〉5万円）【1881 = 明治14・3創立（茨城、直後の83年頃に東京移転——吉田）】が1899（明治32）年【11月】に改称したものである。

1927（昭和2）年11月に常磐貯蓄（1920・3茨城に創立、翌21東京移転）・千歳貯蓄（1897・9東京に創立の興業貯蓄が1920・5改称した中沢貯蓄がさらに24・10改称）2行を合併、28年9月には名古屋の堀川貯蓄銀行（1896・10愛知に創立）を買収して営業範囲を拡大、合併時の資本金は500万円、頭取は八右衛門三男の伊東秀之介、副頭取は河合鉄二（前述）であった（東京市日本橋区通3丁目、418-419頁）。

最後に、私事にわたり恐縮であるが、わたくしの父方の祖父（明治31年生れ）は三男のゆえ若くして郷里（山形県東置賜郡吉島村大字洲島〈スノシマ〉、現同郡川西町洲島）をはなれ海軍に入隊した。十数年にわたり精勤したものの1930（昭和5）年10月末付けで除隊、軍の幹旋で川崎貯蓄銀行に入行し、池袋（東京府北豊島郡西巢鴨町大字池袋、現豊島区池袋本町）の家から滝野川支店や神楽坂支店に通勤した。33年11月刊行の前記『銀行大鑑』によれば、神楽坂支店（椎野寛蔵支店長）はあるが滝野川支店の名はない。父は31〈昭和6〉年8月、祖父の銀行員時代に4人兄弟の三男として西巢鴨（同町大字堀之内）に出生している。しかし祖父は二・二六事件のあった36（昭和11）年に同行を退職し、秋には一家5人で離京、南東北の温泉町（山形県南村山郡上山町、現上市市）に転居した。

実は、祖父の海軍除隊は濱口内閣による『ロンドン海軍軍縮条約』批准（昭和5・10・2、10・1枢密院承認、4・22調印）によるものであり、川崎貯蓄の退職は、同行の川崎第百への吸収合併が契機であった。

遺品の「履歴表」によれば、関東大震災の時は駆逐艦「峯風」に乗船して洋上にあり<sup>(43)</sup>、祖母によれば、二・二六事件の日も普段と変わらず出勤していたと聞く。最後の乗船は補給艦「尻矢」（1922・2・8、横浜船渠にて竣工）であるが、同艦は日中戦争突入後の33年に備砲装備となり、太平洋戦争さなかの43（昭和18）年9月22日に米国海軍のガトー型潜水艦 Trigger の雷撃により沈没、翌44年の10月10日、所在不明のまま除籍となる<sup>(44)</sup>。また、川崎貯蓄を併呑した川崎第百（第百銀行）も、尻矢撃沈と同じ43年、三菱銀行への吸収によってその姿を消すことになる。

過去に“if”はご法度であるが、祖父の除隊と一家の離京の2事象がなければ、出征や東京大空襲には直面したとしても、わたくしの現存在がなかったことだけはほぼ確実となるわけである。

2005年11月6日(日) 攔筆

2006年2月5日(日) 補筆

## 注

- (1) 1927(昭和2)年3月14日の帝国議会衆議院予算委員会における片岡直温大蔵大臣(土佐出身, 1859-1934)の失言を契機として翌15日・月曜日の午前に勃発した。片岡は若槻礼次郎憲政会内閣(第一次, 1926・1・30~27・4・17 総辞職)の、濱口雄幸(土佐出身, 1870-1931)・早速整爾(旧姓中山, 安芸出身, 1868-1926・9・13)につぐ3人目の蔵相として26(大正15)年9月14日から27(昭和2)年4月19日まで約7ヶ月在任した(4月20日から田中義一立憲政友会内閣, 高橋是清蔵相)。若槻(憲政会総裁, 1866-1949)は出雲松江藩土奥村仙三郎の次男として出生し, 叔父若槻敬の養子となった。
- (2) 『昭和財政史』第10巻「金融(上)」(大蔵省昭和財政史編集室編, 大島清稿, 東洋経済新報社, 1955年) 368-373頁。
- (3) 内訳は以下のとおりである。「東京市又は大阪市に本店又は支店を有する銀行にして資本金200万円未満のもの」48行, 「合名, 合資又は個人銀行にして組織変更を要するもの」1行, 「銀行法施行後5カ年間に資本金100万円以上となすことを要するもの」166行, 「人口1万人未満の地に本店を有する銀行にして資本金50万円未満のもの」336行, 「資本金200万円, 組織変更を要するもの」8行, 「資本金100万円, 組織変更を要するもの」22行, 「資本金50万円, 組織変更を要するもの」36行。以上については加藤隆・秋谷紀男編『金融 日本史小百科 —— 近代』(東京堂出版, 2000年) 187頁(原資料は財団法人金融研究会『我国に於ける銀行合同の大勢』1934年, 227頁)を参照。
- (4) 前掲, 加藤・秋谷編『金融 日本史小百科 —— 近代』185, 186頁。
- (5) 日本銀行調査局「東京渡辺銀行ノ破綻原因及其整理」(1929=昭和4年5月)『日本金融史資料昭和編』第24巻「金融恐慌関係資料(一) 金融恐慌一般」(土屋喬雄監修・解題, 大蔵省印刷局, 1969年)所収, 446, 452頁。
- (6) 森まゆみ「渡辺治右衛門で誰だ」『明治東京畸人傳』(新潮社, 1996年:文庫版, 1999年, 初出は季刊の地域雑誌『谷中・根津・千駄木』其の十八, 谷根千工房, 1988年12月)所収, 274-276頁。長女の美尾の夫は入婿の六蔵(実兄の久米良作は東京瓦斯社長)で磐城炭坑社長, 三男の勝三郎は渡辺一族のうち関係会社が最多だった人物である。四男の四郎は千代田リボン(下谷初音町)の創設者で社長を務め, 鉄道写真コレクターとしても著名な人物, 五男の六郎は東大法科卒の秀才で, 自ら水彩画を描き, 宵(ショウ)という俳号をも有していた。東京乗合自動車の社長, 東京渡辺銀行倒産時の専務である。  
一説によれば, 森鷗外(1862-1921)の二度目の妻・荒木志げ(大審院判事・荒木博臣の長女)の最初の夫が勝三郎だという。勘ぐっているのは佐高信氏であるが, 詳しくは『失言恐慌 —— ドキュメント・東京渡辺銀行の崩壊』(現代教養文庫1568, 社会思想社, 1995年)の第7章「片岡直温の覇心」を参照されたい。
- (7) 小川功『企業破綻と金融破綻 —— 負の連鎖とリスク増幅のメカニズム』(九州大学出版会, 202年) 245頁から再引用。
- (8) 同上。
- (9) 下田将美『今なら話せる —— 新聞人の財界回顧』(毎日新聞社, 1956年)。引用は前掲, 佐高『失言恐慌』95頁による。下田将美(1890-1959)は東京市本郷区(現文京区本郷)に生まれ, 慶応大理財科を卒業後, 時事新報社に入社した。1926(大正15)年に大毎(大阪毎日新聞の経済部長, 36年4月に主筆, 38

年9月には取締役主筆に就任した。42年8月から代表取締役編集主幹を務めたが、GHQ命令による報道関係者追放で退陣した。

- (10) 荒俣「マルサの男と『あかぢ貯蓄銀行』——渡辺治右衛門」『奇っ怪紳士録』（ライブラリー27, 平凡社, 1993年）所収, 155-157頁。
- (11) 前掲, 森『明治東京崎人傳』278, 277-278, 278頁。
- (12) 東都通信社編『大日本銀行会社沿革史』（1919年）71頁による。
- (13) 前掲, 佐高『失言恐慌』206頁, 207頁。詳しくは同上書の第14章「かつて『渡辺町』があった」を参照されたい。1878（明治11）年成立の東京府下旧5群（豊多摩〈南豊島・東多摩両郡合併により1896年成立〉・北豊島・南足立・南葛飾・荏原）が「市郡併合」により20区に改編され, 旧15区と合わせ計35区の新生東京市が誕生したのは1932（昭和7）年10月1日である。荒川区も新設区であったが, 渡辺町はこの時点では消滅しなかった。ここはもと「秋田の佐竹侯の下屋敷で三万坪あり衆樂園と称する名園だった」が, 27（昭和2）年の倒産後は「昭和土地の所有となり, 旧六郎邸は樺島礼輔という実業家の所有となった。昭和七年, ……渡辺町は荒川区ができて日暮里渡辺町と名を変え, 九年日暮里九丁目のうちに編入され」, 「名の消えた渡辺町は昭和二十年四月十三日, 空襲によって消失」した（前掲, 森『明治東京崎人傳』297, 298, 299頁）。森氏の叙述の典拠は森田伸子「日暮里渡辺町消滅」山口廣編『郊外住宅地の系譜——東京の田園ユートピア』（鹿島出版会, 1987年）所収, 130-132頁である。
- (14) この組合は, 江戸時代から塩乾魚専門の委託販売市場として栄えてきた四日市組魚市場を近代的な組合に改組したものである。
- (15) 『三菱コンツェルン読本』（『日本コンツェルン全書』Ⅲ, 春秋社, 1937年：復刻版『日本コンツェルン全書』第3巻, 日本図書センター, 1999年）221-222頁, /は原文の改行箇所。
- (16) 『三井・三菱物語』（千倉書房, 1934年）334頁。一方, 「誰も池田翁と呼ぶ者は無い」とされた池田成彬（シゲアキ, 自称セイヒン, 幼名慎平, 1867-1950）は米沢に出生, 慶應義塾理財科・ハーバード大を卒業し, 三井銀行常務取締役・同筆頭常務・三井合名理事・日銀総裁（第14代）・蔵相・商工相・枢密顧問官を歴任した。父はもと羽前米沢藩士で置賜県・沖縄県県吏, 大蔵省官吏ののち両羽銀行（現山形銀行）初代頭取をつとめた池田成章（ナリアキ, 主著『鷹山公世紀』本姓香坂, 1840-1912）, 『自由と規律——イギリスの学校生活』（新書, 岩波書店, 1963年）の著者で国語審議会副会長をつとめた池田潔氏（昭和20年慶大教授, 1903-90）は成彬の次男である。
- (17) 加藤敏彦『日本の銀行家——大銀行の性格とその指導者』（新書216, 中央公論社, 1970年）104頁。
- (18) 前掲, 佐高『失言恐慌』214頁。
- (19) 同上書, 210, 214-215頁, 『』内は灘山日吉編『日本橋四日市組魚市場組合沿革史』1936年からの佐高氏による引用箇所。
- (20) 同, 215頁。
- (21) 長井実編『自叙益田孝翁伝』昭和14年：復刻版, 中公文庫, 1988年の第3話「江戸を経て北海道へ」の末尾に「函館一番の金持」として杉村嘉七なる人物が2箇所が登場するが, 聞き書きの書であるため, 編者の聞き違いと思われる。
- (22) 前掲, 加藤『日本の銀行家』105-106頁。『第四銀行百年史』（第四銀行企画部行史編集室編, 加藤俊彦監修, 同行, 1974年, 48-49, 893頁）によれば, 辻とは新発田藩の蔵宿をつとめた辻金五郎であるが, 第四国立銀行の行章発案者であり, 後掲の『高橋是清自伝』にも高橋の知己として登場する。辻は当時, 新潟第四国立銀行（1873＝明治6・12・24設立認可, 74・3・1開業）の東京支店支配人（白勢彦次郎後任の第二代, 1874＝明治7・5・22～80・3・23在任）の地位にあり, 支店開設以前から東京に私邸を有していた（第5大区4小区神田和泉橋通佐久間町1丁目19番地, 東京支店は明治24年8月の南茅場町移転まで辻邸借用）。

- (23) 前掲, 加藤『日本の銀行家』106 頁。
- (24) 同上書, 107 頁。
- (25) 同, 108-109 頁, 『』内は実業之日本社編『財界巨頭伝』(1930 年) 132 頁からの加藤氏による引用箇所, 傍点は吉田のもの。この時, 「三菱の元老にして, 人物鑑識眼に最も卓越せりと称せられた人である」豊川は, 「一見串田氏の人物優秀なることを看破し」たという(同上)。
- しかし『岩崎久彌傳』(岩崎久彌傳編集委員会編・発行, 1961 年: 復刻版, 東京大学出版会, 1979 年) は, 「当時ペンシルヴァニア大学その他に留学してゐた日本人で久彌が交わりを結んだ」数少ない人物の一人に串田の名をあげて次のように書いている。「串田は同大学政治経済科を出て同市のドレキセル銀行で実習後三菱に入社, 三菱銀行取締役会長, 三菱合資会社総理事になつた」(210 頁)。
- (26) 同, 110 頁, 傍点は吉田。ちなみに野田氏は自著について, 「大正から昭和にかけての約半世紀間, これら主要財閥の経営機構の中で指導的位置を占めた十数名の人々からの直接的取材をもとにして」(「まえがき」) 叙述したもの, としている。
- (27) 同, 119 頁。
- (28) 前掲『岩崎久彌傳』203-204, 204 頁。
- (29) 上塚司編(千倉書房, 1936 年): 文庫版, 上巻(中央公論社, 1976 年) 204, 205 頁。ただし高橋の記述中の串田の肩書き「前の三菱銀行頭取」は同「会長」の誤りである。同行が会長制を廃し頭取制をとるのは四代会長・豊川良平の任期途中からである。「吉田鉄太郎という人」は当時埼玉県令だった吉田清英(薩摩藩士, 秩父事件〈明治 17 年 10 月 31 日発生〉に 11 月軍隊を導入・鎮圧したことで著名, 1840-1918) の子で当時予備門 2 級生, 高橋には未見の若者であったが, 11 月 14 日, 前田正名(マサナ, 薩摩藩医前田善安六男, 明治 23 年農商務次官, 貴議, 1850-1921) の主催による送別会の席上, 牧野伸顕(ノブアキ, 大久保利通〈1830-78〉次男, 明治 39 年第一次西園寺内閣文相, 以後諸大臣歴任, 大正 8 年パリ講和会議全権, 伯爵, 1861-1949) から引率を依頼されたという(同上書, 206 頁)。『財界巨頭伝』は 1930(昭和 5) 年, 『高橋是清自伝』は 36 年(同 11 年, 二・二六事件直前) の出版である。
- (30) 前掲, 加藤『日本の銀行家』114-115, 119-121 頁。
- (31) 渡辺昇(肥前大村藩士, 練兵館塾頭, 維新後大阪府知事, 1838-1913) とともに大日本武徳会を結成した国家主義者・小美田隆美(オミダ・タカヨシ, 1852-1925) の縁戚か?
- (32) 当時の当主は 15 代・久通(明治 17 年子爵, 1843-93) である。
- (33) 当主は深溝(フコウズ) 家第二次七代・忠愛(タダチカ, 1845-62) の養嗣子・忠和(タダカズ, 子爵, 1851-1917) で, 弘道館を創設した常陸水戸藩主の徳川斉昭(烈公, 1800-60) の 16 男(初名昭嗣) として出生した。
- (34) 郵便汽船三菱会社をさす。同社は 1870(明治 3) 年 10 月創立の九十九商会を 74 年に改称した三菱蒸気船会社を, 75 年 9 月に再度改称したものである。
- (35) 同社は明治 14 年政変後の 1882 年 7 月, 井上馨(長州出身, 1835-1915)・品川彌二郎(萩藩士, 1843-1900) ら薩長派が三井物産社長・益田孝(佐渡出身, 1848-1938) 等の実業家の支持をえて設立したものである。
- (36) 三菱は 9 月をもって事業を閉鎖し, 海運関係の資産いっさいと従業員の約 4 分の 1 を新会社に移譲, 彌之助は二代総帥として, 翌 1886(明治 19) 年の 3 月に三菱社を創設する。
- (37) 同校は 1874(明治 7) 年の設立で, 前身は東京外国語学校(73 年設立) 英語科である。77(明治 10) 年に東京大学予備門となり, 86 年第一高等中学校と改称した。
- (38) 後任会長は前筆頭常務の瀬下清(セシタ・キヨシ, 1935・3・5~38・3・5 在任) をへて加藤武男(38・3・5~43・4・1 在任, 同日~20・10・30 頭取, 慶応義塾卒, 池田成彬の義弟, 栃木出身, 1877-1963) へと引きつがれる。



- (39) 同行は第一・三井両行の合同により43年3月27日創立した(行名の当初案は第一三井銀行)。資本金2億円で、会長は第一前頭取の明石照男(渋沢栄一の娘婿, 35年第一頭取, 岡山県出身, 1881-1956), 頭取は三井前会長の万代順四郎(37三井会長, 45年帝銀・全銀協会長, 岡山県出身, 1883-1959)であった。
- (40) 野田貞信編『銀行大鑑』(日本金融通信社, 1933年:復刻版, 1965年)397頁下段。
- (41) 同上。
- (42) 三菱銀行史編纂委員会編, (同委員会, 1954年):復刻版, 三菱銀行調査部銀行史編纂室編, (同行〈東京三菱銀行をへて現三菱東京UFJ銀行〉1980年)。
- (43) (44) 祖父は1923(大正12)年8月25日に峯風で北支那警備のため横須賀を発し, 9月4日に周防の徳山に帰着, 6日から震災地で「関東震災救護任務ニ従事」している。「峯風」とは20(大正9)年5月29日に舞鶴工廠で竣工した大型の航洋駆逐艦(一等駆逐艦)であるが, 44(昭和14)年2月10日, 台湾沖で米潜水艦 Pogy の雷撃を受けて沈没した(3・31除籍)。
- 「ボギー」(マニトワク造船所にて1941・9・15起工, 42・6・23進水, 43・2・12竣工)は戦後まで命脈を保ったが, 46年(7・20)に退役して予備役艦となり, 58年(9・1)に除籍・スクラップとなった。また「尻矢」を撃沈した「トリガー」(メアーアイランド海軍工廠にて41・2・1起工, 41・10・22進水, 42・1・30竣工)は他にも駆逐艦「沖風」を撃沈し(43・1・10, 日本本土沖), 海防艦「笠戸」に損傷を与えたが(44・4・27, パラオ沖), 薩南諸島近海にて敷設艇「大立」を撃沈した45年3月26日に消息不明となり(日艦艇の爆雷により沈没か), 45年(7・11)に亡失と認定, 除籍されている。

(よしだ けんいち 本学助教授 金融論・金融史専攻)